

「罪深い女のしぐさ」

2015年06月18日

ルカによる福音書 7章36節～40節。さて、あるファリサイ派の人が、一緒に食事をしてほしいと願ったので、イエスはその家に入って食事の席に着かれた。この町に一人の罪深い女がいた。イエスがファリサイ派の人の家に入って食事の席に着いておられるのを知り、香油の入った石膏の壺を持って来て、後ろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った。イエスを招待したファリサイ派の人はこれを見て、「この人がもし預言者なら、自分に触れている女がだれで、どんな人か分かるはずだ。罪深い女なのに」と思った。そこで、イエスがその人に向かって、「シモン、あなたに言いたいことがある」と言われると、シモンは、「先生、おっしゃってください」と言った。

主イエスは、あるファリサイ派の人から食事に招かれ、その家に行き、食事の席につかれた。罪人や徴税人たちと食事会をしばしばしていたが、招かれれば、敵対していたファリサイ派の人にも応じていた。招いたファリサイ派の人はシモンという名で、弟子のペトロもヘブライ名ではシモンだから、ありふれた名前であった。彼は主イエスに好意や尊敬を持って、招いたのではなく、落ち度を探し、非難の口実を得るためであった。

その当時は、椅子に座らず、体を横たえて左側を下にして、足を投げ出して、食事をした。この町に一人の「罪深い」女がいた。「罪深い」とはどんな意味なのか。重い病気に罹った人は神に罪を罰せられたと見なされ「罪人」と言われた。しかし、彼女は病気に犯されていたとは思えない。彼女は「遊女」ではなかったか。身を売って生計を立てる遊女も「罪人」と烙印され、ユダヤの共同体から排斥されていた。彼女は主イエスがファリサイ派のシモンの家で食事の席についていると聞き、その家に入って来た。当時は、食事会には誰でも入ってくることができた。それにしても、罪深い女とされた遊女が律法に厳しく生きて、清いと自認するファリサイ派の人に家に入って来たのだから、並大抵の覚悟なくしては、できないことであつたであろう。

彼女は主イエスに背後から近づき、投げ出された足を流す涙で濡らし、髪の毛でぬぐい、接吻し、持って来た石膏の壺から香油を塗った。このしぐさは、私たちには想像しにくい。一見、極めてエロチックである。しかし、このしぐさに彼女の思いの全てが表されている。彼女は、主イエスは罪人、徴税人、遊女たちを招き、人間として認め、共にいてくださる、また、病気をいやし、悪霊につかれた人を正気に戻し、人間回復をもたらし、共同体に復帰させてくださると聞いた。彼女は今、蔑まれ排斥された私を丸ごと受け止め、「よし」として是認してくださいという切なる願いを持って、このしぐさに及んだのである。12年間、出血が止まらない婦人病で苦しんでいた女性が、後ろから、主イエスの服に触れていやしを求めた必死の願いと重なって見える。

シモンは彼女のしぐさを見、彼女の素性も知っていた。心の中で、時の人として注目を集めているイエスという男が本当に預言者ならば、この女が誰で、どんな人であるか分かるはずだと思った。主イエスは、シモンの心の内を見抜かれ「シモン、あなたに言いたいことがある」と言われた。シモンは「先生、おっしゃってください」と応じた。ここから、主イエスは譬えを用い、赦しと愛について語る。そして最後に、彼女に「あなたの信仰があなたを救った。安心していきなさい」と宣言される。(続く)